



東京日々新聞

八百十三號



先入主とあるは古人の確言馴るよりて性も又
 自然と愛せし物なるは讀州香川の郡ある東上の村内よ
 平素女子と思ひたるおしが両親の兒育の
 無能を憂て男子と女子の名を付け育てよと
 世俗の言も信愛は暑さ寒さの衣類より髪化粧
 さら縫仕事と総て女子に操せしむ習ひが氣質と
 姿形粧容止も憎からぬ十八歳に同國ある高松藩の某へ嫁
 勤仕の夜更の暇同家の處女と交通あり近き隣り婦女子
 等より支りて戯るもど更疑ふ人申あけ然るも同國
 三木郡保元村の塗師職なる早藏と呼ぶ男あり
 けりしおしと見惑ふ思ひの丈と撥合せ本地と
 見せし真心の底と研出して云ふ事
 有てたるが基より女子あらしむと旁に語るが
 好事も男と兼知で婚禮あり
 三年が月日成過じ頃日
 おしを送籍の調へ事あり
 願せてたけある髪とを
 きりと散髪天頭の男よと
 七歳あらぬ二拾五で男女の
 籍の判然し是赫々あ
 聖代の御恩澤と云ふもの
 實に痴愚譚よみせ

墨陀西峴

温克龍吟誌



一蕙齋芳幾



具足屋

度山形米

